

## 第五回

人間という哺乳類は、心理的には言語的親子関係、つまり養子の親子関係をもつ存在である。

自分で発明した言語しか話さないディディエの症例。

参加者：あなたがよくお話になる第一次ナルシズムの両親とはなんですか？

F・D： ころの両親、つまりころのお父さんとお母さんのことで、ふたりはわれわれ各自のころに生きています。それで生みの親とはべつの人物がわれわれのリビドーの潜在的発達を可能にし、言語的創造的かつ生殖的側面で交換の運命にむかって能力を開発してくれるなら、どんな人でももう生みの親によって育てられる必要はありません。人間は肉体的には哺乳類に属しますが、心理的には言語的親子関係、つまり養子の親子関係をもつ存在です。

最初子どもは他者との関係で象徴的にみずからを確立します。もちろん人間の生物学的な哺乳機能は存在しますが、これは完全に言語によって刻印されています。おそらくわれわれの巨大な脳とからだのあいだにある不均衡のせいでしょう。

われわれの生物学的な成熟というものはほかの哺乳類とくらべると大きな遅れが目立ちます。周知のように脳が完成するのは28ヶ月のときですし、骨の成長も25歳になってやっと終わるのですから。

哺乳類が産まれてすぐ立ち、つづいてすぐ食べ物を見つけられるようになるのにたいし、子どもは生き延びるために自分を産んだ母親や、あるいは子どもの存在を責任をもって引き受けてくれるべつの人物にかならず結びついています。

われわれは自分の世話をしてくれる人物の言語に適応するとどうじに、われわれのころのなかに住むお父さんお母さんは、永遠に生き続けます。そして去勢のときがやってきます。たとえば男の子は、ころにいるお母さんにむかっていくことはもうできません、彼は女性性をあきらめ、外でそれをふたたび見つけるのです、彼がえらぶ女性のなかに。これこそ真のエディプスです。エディプスは主体のなかで生きられ、ころに住むお父さんとお母さんにたいして作業すべてを行ないます。放散的な（男性的な）機能と受容的な（女性的な）機能についての作業も同様です。

これらの要素が第一次ナルシズムを確立するのですが、身体はそのなかにかんぜんに巻き込まれています。身体は主体にとって放散的であるとどうじに受容的です。しかし性別によって各々はその主調を促進するでしょう、自分のではない性別に属するものをあきらめて、おなじ年齢の人たちやおなじ性をもつ人びととの社会生活というものに適応していきます。

人のころのプロセスであるエディプスが歪められてしまうこともあるでしょう。子どもに性的に固着し、かつそれが無意識的に近親相姦的な方法によってでもあるような、

お母さんとお父さんの言語的關係によっては、あるでしょう。

それこそが人を、性器的な身体において支配的である同性愛に導く原因なのです。この大人の同性愛はもっとも偉大な文化的昇華を可能にするということも分かっています。生殖と同様、象徴的な一性器面では実現できないのですから一父性と母性とが、言語的・文化的かつ芸術的な方法で、その出口を見出すというわけです。

参加者： それではディディエの症例に入りたいと思います。彼は5歳の男の子で、自分で発明した言語しか喋らず、しかもわたしはその言語を理解できません。どのようにとりかかったらいいのでしょうか？

F・D： その子は音楽をやる子ですか？

参加者： そうです。

F・D： よくあるんです。音楽をやる子どもでとても頭がいいのに、親は馬鹿ものあつかいするんですね。こういう子どもたちは言語を理解しているときでも、ふさわしいときに話さないのです。まわりは赤ちゃんことばで話しかけるのですが返事を期待しないし、理解しているということを知ろうともしません。ほんとうにこういう子どものためにこそ心理療法が勧められるべきです。なぜならこころの中に大人の社会に否定的な態度でいる奴隷たちを住まわせているからです。そういう子は聴覚的にはたしかに才能に恵まれています。でもまわりが言語を教えながらその子を馬鹿者にしてしまったのです。

きっとディディエには弟の出生の話があるでしょう。それからお母さんですが、お兄さんとして話しかけることをしないで、乳児に話すようにあの馬鹿げた赤ちゃんことばで話したのでしょうか。

参加者： いまわたしはとくにお母さんと会っています、彼もそこにいますが。

F・D： でもどうして母親と話すんですか？

参加者： だっていずれにせよ、ディディエは話そうとしませんよ。

F・D： お母さんが一緒のときですら、あなたは彼と関係をつけられないのですか？これはお母さんのためではありません、彼のためです。彼が主体の価値をもち、価値のある会話者として存在するように、お母さんには黙っててもらわなければなりませんね。もし息子のかわりに答えたがったら、あなたは人差し指を口にあてて答えてはいけないということを理解させてください。彼の言うことや答えることをお母さんが代わりに解釈して

言うよりは、子どもの返答が理解できないことのほうがましです。たとえばお母さんに「もしなにか言いたくなったらそれを紙に書いて渡してください」と言いましょう。それからディディエには「お母さんには話して欲しくないの。わたしにとってだいじなのは君なの。もしお母さんがなにか言いたければ、書いてくれるでしょう。」と伝えておきます。そしてもし母親がなにか書いた場合には、それを子どもに読んでやりましょう。

参加者： でもお母さんだけではありません、よくお祖父ちゃん、お祖母ちゃん、弟が来るし、けっきょく家族全員が来るんです！

F・D： それはわかるがわる来るんですか？全員一度には来ないんですか？

参加者： 何回かはみんな一緒に来ました。

F・D： いいでしょう、全員にはいってもらいましょう。それはたいしたことではありません、みんなに黙っていてもらえばいいのですから。子どもには「わたしはご家族に君を理解する手助けをしてもらいたくありません、そうじゃないと君は成長できないからね。」と言っておきます。じつは家族が話す以上のことをしゃべりたいのは、子どものほうなのです。

参加者： でも結局彼は、この言語にすごくしがみついています。

F・D： そうです、でもそれ以上に音楽に執着しているはずです。ピアノ教師をつけてあげたらいいんですけどね、そうしたらどれほど彼が音楽的な子どもか、分かるでしょう。

彼はことばの形態・言語には興味がありません。神経生理学者がそれについてわれわれに説明してくれるといいのですが。情報が脳半球のどこにどう記載されるかによるのです。絵だとか線は片方の半球に記載されて、色はもう片方に記載されたりするのです。同様に、ことばの響きは一方の半球に認知され、ことばの単語としての形態はべつの半球に認知されるのです。

参加者： これは彼自身が自分のために創り、きちんとした形態をもった言語です。

F・D： たしかにそうですね。これはこの子の自閉のありかたなのです。でもこの自閉症のおかげでこそ単語の意味やコード以上に多様なその変形や響きによって、彼はコミュニケーションをとっているのです。

参加者： 彼のこの言語にはほとんど文法といえるものが存在します。

F・D： もちろんです！それを勉強してみなさい、とても興味深いことでしょう。あなたはこの子の無意識が理解できるでしょう、彼はひとつの言語をつかって、コミュニケーションしようとしているのです。

参加者： そうです、彼ははっきりなしに話しています。

F・D： わたしもディディエと似た症例を持っていますよ。わたしはなにもしませんでしたし、その子に会うつもりもありませんでした。ただご両親には音楽の先生をつけることと学校に行かせることを助言しました。あらかじめ担任の先生にはいろいろ説明しておきました。彼がとてもよく喋るということ、ただ理解されないように彼自身の言語をわざと使っているのだということ、それから医者には検査して子どもが話したくなったときにはとてもうまく話せるだろうと言ったことを伝えました。すると学校で彼は完璧に話すようになったのです、家では彼の言語を使いつづけていたのにね。ではどうして彼は変わったのでしょうか？お分かりかも知れませんが、彼の言語が兄弟姉妹たちをたいへん面白がらせて、こうやって彼は望むものをいつも手にいれてきたからなのです。これはヒステリーですね、人が望むことがすべてなのです、人びとの興味を引くためになされたことなのです。そしてこの理由によつてこそ、彼を尊重してやらねばならないのです。彼には発展させるべき奇妙だが個人的長所というものがあるからです。鋭い聴覚、まわりの世界への情緒的な適応性といったものです。面白いけれど重要ではない会話者と思われている彼は、家族にたいしてもディディエと似たように振舞っていたのです。

かなり後になって消息をききました。ご両親は学校ではすくなくとも彼がしゃべることについて安心し、かつ家ではわけの分からないことばを使うので面白がりつつも困惑していました。

彼は「林間」学校に行つてからは彼の言語を使うのをやめました、そこでは共同生活が営まれたからでしょう、家とおなじようにね。

この子の家庭でけっきょく精神分析をしたのはお母さんでした。わたしのことをいいカウンセラーだと評価したご両親の医者によつて、彼らはうちにやつてきて発音矯正士の住所を知りました。もしこの家庭が子どもを医学教育的な面談にしたがわせたとしても、発音矯正の再教育にとっては良かったのはたしかです。数ヶ月続いたでしょう。ただこの子は学校に行かず、その言語をなおす気持ちもないようでしたし、音楽がなければ彼のようなタイプは聴覚的な知性を認知されないものです。これは考慮される必要があります。

ディディエについてですが、お父さんには会いましたか？彼は息子に話しかけていますか？

参加者： はい。

F・D： なにか興味深いことを言っていますか？

参加者： ええ、でもお父さんはあまり真剣じゃないんです。とくにお母さん、母方の人たちみんなは関心をもっています。

F・D： お母さんに会うなどとは言いませんけれども、子どもとおなじ日に会わないようにしましょう。彼女が自分のために来てくれるといいんですが、子どものために来る日には黙っていてほしいものです。それからディディエが来る日にはお父さんかお祖父さんの付き添いを頼みましょう。この子はまったく退屈な話しかできない女性たちに囲まれて、おそらく大人の言語以下のところにとどまっていたいと望んでいるんでしょう。大人、というのは彼の場合そういう女性たちによってもっぱら占められているんです。

この子を「男の子化」することはいいことでしょうね。

参加者： 女性たちが彼をまったく望んでいなかったような家庭なんです。おまけに母親は娘しかほしがらず、男の子が誕生するといつもそれは破滅的なことでした。

F・D： あなたがいまおっしゃったことはほんとうにすばらしいことです！この子は早いうちから、男の子の体をもつ主体としては、価値ある対話者としての位置をもつことができないことを感じとってしまったのです。ほんとうは違うのに娘のように、女性たちの欲望にしたがって話すよりむしろ、あの天使の身分を得ることを彼は好んだのです。しゃべる人間の身分を持つが地上の言語を用いない、そういう位置を好んだのです。

この天使は男性が話す言語についてはなにも知らないまま女性の使うのともちがう言語で話しています。あなたは女性ですが、ではなにがこういう状況でできるでしょうか。

お父さんとお祖父さんにはかならず会いましょう。彼は5歳でしたか？発達障害児ではないこの子にとって、それはエディプスの年齢です。そして奇妙なこの言語は、母親を持ちたいがための彼の策略なのです。

参加者： 発達障害児ということばは、どう理解されますか？

F・D： ディディエはリビドーの観点からいうと遅れがあるわけではありません。ただパフォーマンスの面で遅れているのです。彼はべつのケースを思い起こさせます。最近、わたしの面談にある男の子が連れてこられました。とても頭のいい子で—とはお母さんの話ですが—ぜったいに飛び級をさせるべきだと言うのです。

医者の方は経験豊富な精神分析家でもあるのですが、さいわいにもただちに適切な一連の質問を投げかけました。ひとりで食べたり、お肉を切ったり、からだを洗ったり、ふ

いたりするかどうかです。すべてにたいして答えはいいえでした。医者は、「よろしい。もし二週間後にひとりで彼がうちをできるようにならいたら、そのときは飛び級のお手伝いをしましょう。」と言いましたが、これはつまりこの子が動作性能力の獲得を示したら、そのときは認めるということです。この医者がいなかったら、この子は精神病に一直線にすすんでいったことでしょう。なぜなら彼はまったくお母さんの身体の部分対象にとどまったまま、学校に行かされたことでしょうから。

一ヶ月のあいだに、この子はすべてひとりでできるようになりました。

以上が子どもとはどういう存在であるか、という例であり、それを知らなくてはなりません。子どもは話すことよりまえに、そういうすべてができるようにならなければなりません。さもなくばただことばのもつ音楽性のなかに座礁してしまって、言語のもつ社会性との接触をうしなってしまうのです。

子どもが5歳になったら必要不可欠なことがあります。それは完全に自分で自分のからだの世話をすること、お母さんなしでもできること、自分の生理的欲求にかかわることすべてのためにそこにいるお母さんを、子離れさせることです。

参加者： わたしはディディエのケースで、まさにそのためにこそお母さんとセラピーをすることが大切だろうと思ったのです。

F・D： 分かりました。でももっと本質的なことは、未成熟な情動は、ディディエの場合のようにマージナルな言語によって埋め合わされてしまうか、さっきの例のようにずば抜けた学力によって埋め合わされてしまうかなのだと、理解することにあります。

ただ彼らはあまりにも脆弱な子どもたちなので、どんな些細なことがらでも心的外傷になってしまうということなのです。

わたしは7歳だったか8歳だったかの男の子のケースをもっていますが、その子のお母さんは子どもと乳離れできずにいました。彼女のまえでわたしは子どもに、彼がいなくてもやっていけるようにお母さんを助けてあげるのは彼のほうだということ、そしてお父さんにも助けてもらうように、言いました。そうしてある日、いつものようにお母さんは子どもの面接のときいっしょに入りたがったのですが、子どもはお母さんの鼻先でドアを開けてしまったのです。

わたしはお母さんが待合室ですすり泣いているのを感じました。それで子どもといっしょに彼女をなぐさめに行きました。子どもに「あまりに君がはやく大人になっちゃって、それがお母さんには予想外のことだったので、ママは悲しいのよ。」と言うと、彼は「ママ、あのね、もうパパにべつの赤ちゃんをつくろうって頼まなくちゃいけないときだよ。そしたら8年間（彼は8歳でした）世話をやくことができるよ。」と言ったのです。この子の成長を確認するのは信じられない思いでした。この子はそのときまさに、子離れできないでいる母親に固着した、非行少年になろうというときだったんですよ。

ではディディエのケースですが、たとえば彼のような言語にはからくりというものがあるって、それはお母さんと彼はいまなお関係を持たざるを得ないということなのです。お母さんが唯一彼のことばを解読できるのですから。それが話の核心です。でも良い生徒でいることのほうがそれよりも問題ですね。そういう場合は、みんなあなたに母親ばなれできた子どもであると信じさせるでしょうから。そうなったらもう出口はないのです。